


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2018年7月


博士学位申請論文審査報告書

論文題目：「複言語育児」を実践する親たちの意味世界
—共通了解の成立を目指す日本語教育の提言—

申請者氏名：稲垣 みどり

主査 館岡 洋子 署名 館岡 洋子 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 宮崎 里司 署名 宮崎 里司 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 福島 青史 署名 福島 青史 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

＜本論文の概要＞

移動が日常化している現代において、成人と異なり自分の意志で「移動」することのできない子ども達の「移動」と「言葉」にかかわる問題は、人間形成そのものに関わる問題として、子ども自身にとっても親にとっても重要であり、また日本語教育においても検討すべき現代的課題である。

本博士学位申請論文（以下、「本論文」）の大きな目的は、「複言語育児」を実践する親たちが立ち上げた子どもの言葉のコミュニティの理念の創出のために、言語教育をめぐる価値づけの共通理解の成立はどのようにしたら可能かを問うことである。そのために、「移動する親」の「複言語育児」の意味世界を描くことを試みて、以下のリサーチクエスチョンを立てている。

RQ1：その子どもは、なぜ、いまここ（国でありコミュニティであり学校教育機関である）にいるのか。なぜ、どのようにして「親」は子どもを、それらの言語の取り巻くその場所においたのか。

RQ2：移動する「親」はその子どもを将来どこに移動させるのか、あるいはさせないのか、という将来の具体的な展望は何か。またそれにとまって形成される我が子に必要な「言葉の力」とは何か。

本論文は、全 215 ページで、第 1 章から第 7 章までで構成される。各章の概要は以下のとおりである。

第 1 章「本研究の目的と問題の所在」では、本論文全体の目的と問題の所在が述べられている。

第 2 章「複言語環境で生きる子どもと親は日本語教育の文脈でどのように議論されたか」では、日本語教育の課題として、なぜ「複言語育児」の問題を解く必要があるのか、複数言語環境で成長する子どもとその親に関する先行研究を概観している。

第 3 章「本研究の視座―「複言語育児」という課題」では、「複言語育児」の概念の理論的な枠組みを示している。ここでいう「複言語育児」とは、申請者による造語である。「複言語育児」とは、自らが「移動」によって複言語複文化能力を身につけた「移動する親」が、その複言語複文化能力を駆使して実践する言語実践としての育児の営為を表すとする。「複言語育児」は、子どもと親または養育者の相互主体的な関係に基

づく営為であり、親と子が互いに動態的に変容しつつ、ともに言語を通じて社会と関わっていく営為であると説明する。

第4章「アイルランド在住の親たちの「複言語育児」」では、第1章で示したりサーチクエスチョンを明らかにするために、アイルランドで子どもを育てる3人の在留邦人の親たちの「複言語育児」の意味世界をライフストーリーインタビューで描く。3人の親たちは、それぞれ「移動する女性」として自らの主体的な意思のもとに異文化出身のパートナーを選択し、形のうえではパートナーにともなってアイルランドに移住してはいるが、意識のうえでは在住国であるアイルランドと成人まで自分が生活体験を重ねた日本を絶えず往還しつつ、子どもにとって望ましい教育環境としてアイルランドを意図的に選択している。そして親たちは自らの外国語学習の経験や海外生活経験、また将来設計や子どもへの期待など様々な要素から、自らの言語教育観や子どもの日本語学習の位置づけに関する考え方を形成していることが明らかになった。

第5章「「移動する親」が「複言語育児」において目指す「言葉の力」とは何か」では、「本質観取」の手法を用いて第4章の3人の親たちのライフストーリーインタビュー調査のさらなる分析を行った。その結果、この3人が「複言語育児」において目指す「言葉の力」の内実としてあげるのは、次の3点であることが検証された。

- ①複言語複文化能力を駆使して発揮する、どこででも生きていける力
- ②自分とは異なる価値観をもった他者を認め、共生していける力
- ③国際社会の中で自分を発信していける力

第6章「「日本語教育の専門家」は何ができるか―「複言語育児」の視座が示唆する実践への提言」では、アイルランドの在留邦人の親たちを対象に行った「本質観取」のワークショップ実践を説明し、「移動する親」が子どもに望む「言葉の力」の共通理解が成立していく様子を描いた。

第7章「日本語教育学における本研究の位置づけ」では、親の視点に立った「複言語育児」の分析概念を通じて「移動する親」の育児の在りようを描くことが日本語教育学においてどのように位置づけられるのか、以下の2つの観点から論じている。1点目は、「育児」の視点に立つことの重要性である。親の視点、育児の視点に立つことの重要性を日本語教育の専門家の在り方とともに論じている。2点目は、「複言語」の視点に立つことの重要性である。「複言語育児」の視座から、「日本語教育」を「複言語教育」に開くことの重要性を指摘している。

＜本論文の評価＞

評価できる点

(1) 本研究は、アイルランドを事例に「移動する親」たちの「育児」の在りようを「複言語育児」の分析概念を立てて論じたものである。「複言語育児」という用語を作り、その視点に立つことによって、学校その他の教育機関等の固定的な視点を超えて移動する親と子どもの動態性を扱うことを可能にしたといえよう。

(2) 複数の言語をもつ子どもを「移動する親」という視点から捉え、子どもが育つ環境、つまり、家庭、学校において、夫婦、親子、家族間の信念対立があること明らかにした。

(3) さらに、この対立を解決する手段として、本質観取を通じて共通理解を目指す手法を提案し、日本語教育に価値対立の解決の手段を取り入れた。

(4) 3人の移動する親からの丁寧なライフストーリーインタビューによる調査、分析は、「複言語育児」の実態をあらわす声として評価することができる。

(5) 移動する親であり、日本語教育専門家でもある申請者自身の体験に根差した課題設定による本研究は、今後関心が高まる海外における日本語教育研究の領域の一つとして重要な問題提起を行っており、また、貴重な実証研究である。管見の限り先行研究がなく、オリジナリティの高いものと見受けられる。

問題点・課題

(1) 申請者が移動する親であり日本語教育専門家であることから、その両者が混在した視点となっていることがある。日本語教育専門家として親の視点を入れるということは、どういうことなのか、もう一步踏み込んだ議論がほしい。

(2) 開かれた日本語教育の専門性の意義を述べ、かつ、日本語教師にも、「複言語育児」の視座を持つことを主張しているが、どの程度、それが「共通理解」となりうるのか、また、どの程度、日本語教育学のパラダイム転換に寄与するのか、やや疑問が残る。

(3) データから「本質観取する」プロセスが見えにくく、結論部分に丁寧な導入を施すことが求められる。

(4) 現象学の用語を取り入れたことから、日本語教育学との用語の異同がみられ、

誤解を招く表現がある。

(5) アイルランドの事例を丁寧に検証しているが、国自体の言語政策が「複言語育児」の教育にどのような影響を与えているのか、もう少し深い考察が望まれる。

＜本論文の判定＞

上記のように、今後さらに考察されるべき課題は残されているものの、本申請論文はオリジナリティのあるものであり、その主張および提言は、日本語教育学において意義のあるものである。よって、博士（日本語教育学）の学位を授与するに値する論文であると認められる。

なお、本論文にあった誤記は、添付の「日本語教育研究科 博士学位申請論文修正リスト」のとおり修正されたことを確認した。

博士学位申請 論文題目	「複言語育児」を实践する親たちの意味世界 ー共通了解の成立を目指す日本語教育の提言ー		
申請者	稲垣 みどり		
修正リスト提出日	2018年 8月 17日		
ページ番号・行	修正前	修正後	備考
I. 本文			
p8, 08	成人に <u>たち</u> して	成人に達して	「たち」を「達」
p9, 025	<u>いかなる</u> 言語教育の	<u>新たな</u> 言語教育の	いかなる→新たな
p17, 01	補習校授業校	補習授業校	補習授業校→補習校
p18, 06	エイジェンシーであり <u>そも</u>	エイジェンシーであり、 <u>そもそ</u>	「、」追加
011	仕事に <u>関わる</u> かぎり、	仕事に <u>関わり</u> 、	関わるかぎり→関わり
018	という、 <u>「年少者日本語教育</u>	という年少者日本語教育の文脈	句読点と「」をトル
p25, 022	2) 移動する「親」	2) 「移動する親」	「移動する親」
p32, 012	課題として、 <u>発たち</u> 段階に	課題として、発達段階に則した	「発たち」→達
p33, 08	人の <u>発たち</u> とは文化的な <u>発た</u> <u>ち</u> であるとする	人の発達とは文化的な発達である	「発たち」→ 「発達」2か所
p39, 023	親の <u>声</u> が <u>前景化</u> するあまり、	親の <u>声</u> が <u>前面</u> に出ることが多く、	
p50, 04	2) 移動する「親」	2) 「移動する親」	「移動する親」
p60, 029	先の第 <u>三</u> 段階	先の第 <u>3</u> 段階	「三」→「3」
p63, 03	発たち心理学者の	発達心理学者の	「たち」を「達」
04	子どもの <u>発たち</u> を、	子どもの <u>発達</u> を、	「たち」を「達」
06	そしてその「 <u>発たち</u> 」を、	そしてその「 <u>発達</u> 」を、	「たち」を「達」
p66, 019	(次ページ、図3	(次ページ、図1	
p67	図3 図のタイトル(図の上) 育児戦略の3つの～	図1 図のタイトル(図の下に入れる) タイトルの内容は変わらず	図3→図1
p69, 022	の分析概念がたとえ学校	の分析概念が、たとえ	句読点を追加
p71, 012	2) 移動する「親」	2) 「移動する親」	「移動する親」
p79, 028	カルダー淑子による「プリン	カルダー淑子 <u>ら</u> による「プリンス	「ら」を追加
p84, 012	2) 移動する「親」	2) 「移動する親」	「移動する親」
p88, 011	立ち上げ <u>こ</u> のような	立ち上げ <u>た</u> このような	「た」を追加

p89, 018	2) 移動する「親」	2) 「移動する親」	「移動する親」
p95, 04	学力たち成	学力達成	「たち」を「達」
p97, 表1	「全受験者数」と「アイルラ		表1の空欄に
左上から3つ	ンド語」の間の空欄	英語	「英語」を挿入
p98, 017	大学受験に直結	○（一字空け）大学受験に直結	段落最初1字空 け
p102, 020	感じはじめた	感じ始めた	はじめた→始めた
p105, 07	得ていた <u>存在</u>	得ていた <u>人物</u>	存在→人物
013	「日本語が <u>よわい</u> 」	「日本語が <u>弱い</u> 」	よわい→弱い
014~15	授業が行われた	授業が行われていた	れた→ていた
016	「日本文化」の継承 <u>も</u>	「日本文化」の継承を <u>図ることも</u>	も→図ることも
018	自由になった、しかし理念	自由になった <u>が</u> 、しかし理念	「が」を追加
023	持つものなのか。その意味	持つものなのか、その意味世界	「。」を「、」に
p106, 016	多くなされている。(太田	多くなされている(太田~)。	「。」の位置移動
025	したいこと、 <u>それは</u> 調査	したいことは、調査協力者	「それ」削除
p108, 025	<u>竹田現象学に依拠する形で</u>	<u>竹田青嗣の現象学の解釈に依拠</u>	
027	「移動する親」たちの <u>めざす</u>	「移動する親」たちの <u>目指す</u>	めざす→目指す
p114, 014-15	分析対象とした。	分析対象とした。便宜上、表4の BさんをAさん、CさんをBさん、 EさんをCさんと以下に表記す る。	一行を追加 (便宜上~表記 する、の1行追 加)
p119, 015	(私の経験談 よく聞き取れず)	(私の経験談)	よく聞き取れず 削除
011	W: やりとりの中で。	W:やりとりの中で。	「や」の前一字詰める
p123, 013	行ったんでしょ。(ゲーリック	行ったんでしょ(ゲーリックスク ールに)。	「。」の位置を() の後に移動。
018	その時、 <u>まつよ</u> さんは	その時、 <u>A</u> さんは	まつよ→A
021	私が <u>おもった</u> のは	私が <u>思った</u> のは	おもった→思った
p129, 013	隣のおばさんとか	隣 <u>り</u> のおばさんとか	「り」を追加
p130, 01	生活を <u>A</u> さんは「子育ての	生活を <u>B</u> さんは「子育ての	Aさん→Bさん
023	仕事なりなんなり	仕事なりなんなり。	文末に「。」追加
p131, 020	んですよって。(笑)	んですよって(笑)。	「。」の位置移動
p132, 02	目標として <u>される</u>	目標として <u>設定される</u>	される→設定される
04	学業たち成	学業達成	「たち」→「達」
p135, 025	ところ <u>である</u> 。	ところ <u>であった</u> 。	ある。→あった。

p141, 011	この通常 7～8 科目を受験し	通常 7～8 科目を受験し	「この」をトル
027	1988 年から <u>五</u> か年計画ごと	1988 年から <u>5</u> か年計画ごと	五か年→5 か年
p144, 05	増加によって <u>増えつつある</u>	増加によって <u>多様性を増す</u>	
025	次の <u>四つ</u> の観点	次の <u>4つ</u> の観点	四つの→4つの
p146, 017	是とする理由は地域コミュニ	是とする理由は、地域コミュニテ	句読点「、」追加
018	在り方に <u>焦点化</u> される	在り方に <u>求められる</u>	
p147, 06	ども <u>は</u> その教育を受けさせ	ども <u>には</u> その教育を受けさせ	「は」を「には」
023	受けさせることを <u>是として</u> C	受けさせることを <u>を</u> C さんは選択	「是として」削除
p148, 05	<u>実質上</u> 英語が母国語であり	<u>実質的に</u> 英語が母国語であり	実質上→実質的に
022	2) 移動する「親」は	2) 「移動する親」はその子ども	「移動する親」に
p149, 011	四つの観点	4つの観点	四つの→4つの
016	二つの観点 (2 か所)	2つの観点 (2 か所)	二つの→2つの
p150, 06	次の二点である。	次の 2 点である。	二点→2 点
p151, 01	言葉を使い、おぼえていく	言葉を使い、覚えていく	おぼえ→覚え
p157, 019	手法である。 <u>岩内</u> に	手法である。 <u>Iwauchi</u> に	岩内を Iwauchi に
p159, 08、9	を	を考えてみる	2 行にまたがつ
	考えてみる		ている→1 行に
p161, 09	裕子さん	Y さん	裕子→Y
018	今年 <u>10 才</u> を迎える。	今年 <u>13 才</u> を迎える。	10 才→13 才
019	裕子さん	Y さん	裕子→Y
021～022	不登校、ひきこもりとなり、Y さんともコミュニケーション をとらなくなっている。	不登校、ひきこもりがちとなつた が、現在は改善している。	行の内容を修正
025	先に○章で私は	先に私は	「○章で」を削除
p168,	親たちは、それ以前はあまり	親たちは、頻繁に連絡を取り合い	「それ以前は～関わ
017～18	面識のなかった間柄にも関わ らず		らず」の 1 行を削除
p171, 011	の発 <u>たち</u> を移動の	の発 <u>達</u> を移動の	「たち」を「達」
p173, 08	<u>文科省</u> の文化審議会	<u>文化庁</u> の文化審議会	文科省→文化庁
p174, 011	を有し、日本 語教員及び	を有し、日本語教員及び	「日本」の後に 一字詰める
015	(注 p13)	(p13)	「注」をトル
p178, 03	【図 5】	【図 2】	図 5→図 2
	図のタイトル (図の上)	図のタイトル (図の下に入れる)	

p181, 08	育児戦略の3つの～ 複数言語 <u>教育</u> に生きる子ども	タイトルの内容は変わらず 複数言語 <u>環境</u> に生きる子ども	「教育」→「環境」
021	成年にたちするまで	成年に達するまで	「たち」→「達」
p182, 01	日本語養育	日本語教育	
07	現場実践や	現場実践者	
p184, 01	【図3：再掲】 図のタイトル、上	【図1：再掲】 図のタイトルを図の下に	図3→図1
p185, 01	【図3】	【図1】	図3→図1
06	【図3】	【図1】	図3→図1
017	【図6】	【図3】	図6→図3
p186, 01	タイトル「複言語育児」の～ 【図6】	タイトルを図の下に移動 【図3】	図6→図3
p188, 01	【図7】 図のタイトル（図の上）	【図4】 図のタイトル（図の下に入れる）	図7→図4
図の下	【図7】	【図4】	図7→図4
p194, 013	欲望論	「欲望論」	「」を付ける
p197, 027	「人手不足」	人手不足	「」をトル
p199, 017	新たな視角をもたらす	新たな視座をもたらす	「視角」を「視座」
018	分野を超えて	分野を越えて	「超えて」を「越えて」
p200, 019	私は「複言語育児」の実践	「複言語育児」の実践	「私は」削除
p201, 06	ー「自分にとっての生きる	「自分にとっての生きる	文頭「ー」トル
06	この問いが、	この問いは、	「が」を「は」に
07	私を日本語教育の研究として	日本語教育の研究として	「私を」トル
07	育児」を描こうとする根本的	育児」を描こうとした私の根本的	とする→とした私の
07	動機である	動機に重なる	である→に重なる
Ⅱ. 参考文献			
p210, 最終行	→場所はここでよいのか？	削除（（人間科学叢書）で終わる）	
Ⅲ. 概要書			
p3, 017, 18	「子どもとともに移動する」	子どもとともに移動する	「」トル
p4, 06～7	子どもと親または養育者	子どもと親（または養育者）	（）を付ける
p4, 028	第2章 複言語環境で生きる	第2章 複数言語環境で生きる	複言語を複数言語
p6, 09	本研究の移動する親の視点	本研究の「移動する親」の視点	「」を付ける